

2015 年度 修士論文
日本卓球リーグでプレーする
中国選手の減少とその背景

Reduction and related background of
China players
in Japan Table Tennis League

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5 0 1 4 A 0 4 3 - 4

練 舒怡

研究指導教員： 武藤 泰明 教授

目録

第1章 緒言	1
第1節 国際卓球の概況と中国のポジション	1
第2節 中国における卓球の概況	2
第1項 中国卓球選手の育成システム	2
第2項 中国卓球協会	3
第3項 中国卓球リーグ	4
第4項 海外に行った卓球選手	5
第3節 日本における卓球の概況	5
第1項 日本卓球選手の育成システム	5
第2項 日本卓球協会	6
第3項 日本卓球リーグ	6
第4節 日本リーグでプレーする中国選手の傾向	7
第2章 研究の目的と先行研究	8
第3章 研究方法	10
第4章 結果及び考察	11
第1節 海外リーグプレーするまでのプロセス	11
第2節 減少の背景	14
第1項 選手	14
第2項 日本卓球実業団チーム	20
第3項 中国卓球協会及び代表チーム	26
第4項 日本卓球協会	28
第5章 結論	29
第1節 まとめ	29
第2節 先行研究との比較	31
第3節 日本卓球プロリーグ、卓球アジアリーグへの期待	32
引用・参考文献	34

第1章 緒言

第1節 国際卓球の概況と中国のポジション

第一段階 欧州の全盛段階(1926～1951):卓球はヨーロッパで誕生したので、ヨーロッパは卓球の最も強い地域だった。第1回から第18回までの世界選手権大会に、ヨーロッパ選手が107回優勝している。

第二段階 日本の躍進(1952～1959):この時期の七回の世界選手権の49の優勝の中、日本選手は24にのぼり、全数の49%を占めた。

第三段階 中国の台頭(1959～1969):3回の世界選手権に参加し、11回の優勝を得た。

第四段階 欧州の復興及び欧州とアジアの競争(1971～1995):グローバル化の進展に伴い、卓球スキルが急速に普及した。各国はライバル国のスキルを学び、新しい打ち方を開拓した。欧亜競争となった。

第五段階 中国の独り勝ち(1995～)

90年代中期から、中国は独り勝ち状態となってきた。1995年から2015年までの世界選手権の75回の優勝の中、68.5個(2015年混合ダブルスは中韓混成チームが優勝した)を取り、全数の91.3%を占めた。国際卓球連盟は中国の一人勝ちを止めるため、何度もルールを変更した。例えば、2000年に、ボールの直径は38mmから40mmにした。2001年には、従来の21点制から11点制に変更され、サービスも5本ずつの交代から2本ずつの交代に変更された。また、2002年にはサービス時にボールを隠す行為(ハンドハイド、ボデーハイド)が完全に禁止された。2008年9月から有機溶剤性接着剤の使用が禁止され、その1ヶ月後に補助剤を用いた後加工が禁止された。しかし、効果があまりなく、中国一強状態が続いている。2009年、当時中国卓球協会の会長であった蔡振华は他国の選手をライバルに育て上げて卓球界全体を振興させようと提唱し、「養狼計画」を発表した。「養

狼計画」とは、各国に中国からコーチを派遣して中国の技術を教え、強いライバル（狼）を養成しようとする計画である。

第2節 中国における卓球の概況

第1項 中国卓球選手の育成システム

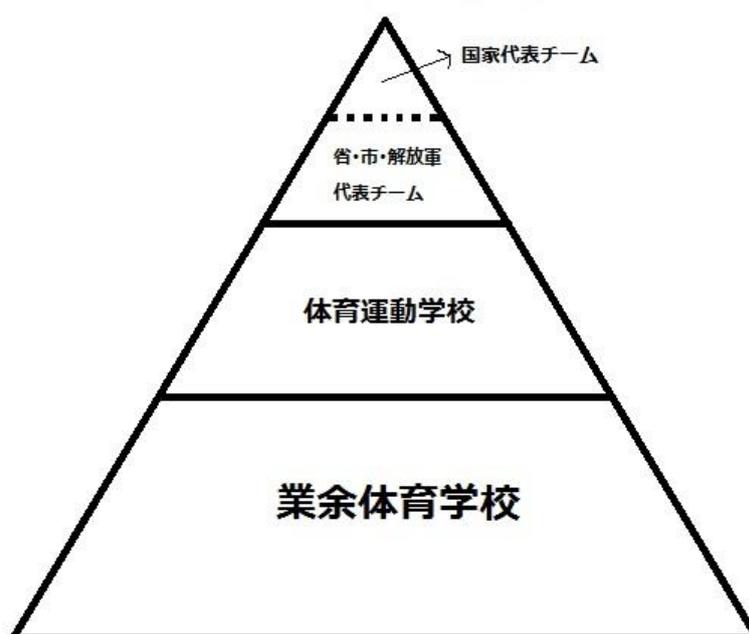


図1 中国卓球選手の育成システム

中国には、国技といわれる卓球の選手育成システムも大多数の競技種目と同じ、挙国体制を徹する。図1に示した通り、5、6歳から初級の业余体育学校¹⁾に通うが、成績の優秀な子は、中級の体育運動学校に選抜され、基礎文化課程を受けさせ、卓球の技術向上を目的とした練習を实践する(魚住・鄭, 1999)。優秀な選手は、今度体育学校を抜け出て、地域ごとに集められ、地域代表として指導を受ける。すなわち、いわゆる省・市・解放軍代表チームに入って、“専業選手”となる。“専業選手”とは、所属チームに基本的な衣食住

¹⁾「業余」とは「アマチュア」くらいの意味である。また、中国では、スポーツを「体育」と呼ぶ。

と豊かな練習環境、指導者を提供され、月給をもらう選手である。これらの選手は全国各地で良い成績を取れば、今度は北京に召集され、国家チームの一員として、集中訓練を行い、オリンピック、世界選手権などに出場できるように日夜努力することとなる。この国家チームを頂点としたピラミッド型の選手育成システムは「三級制度」と呼ばれ、中国卓球選手養成の基本システムである。このシステムは初級レベルの選手が約3万人、中級が約2000人、国家チームが約100人である。

第2項 中国卓球協会

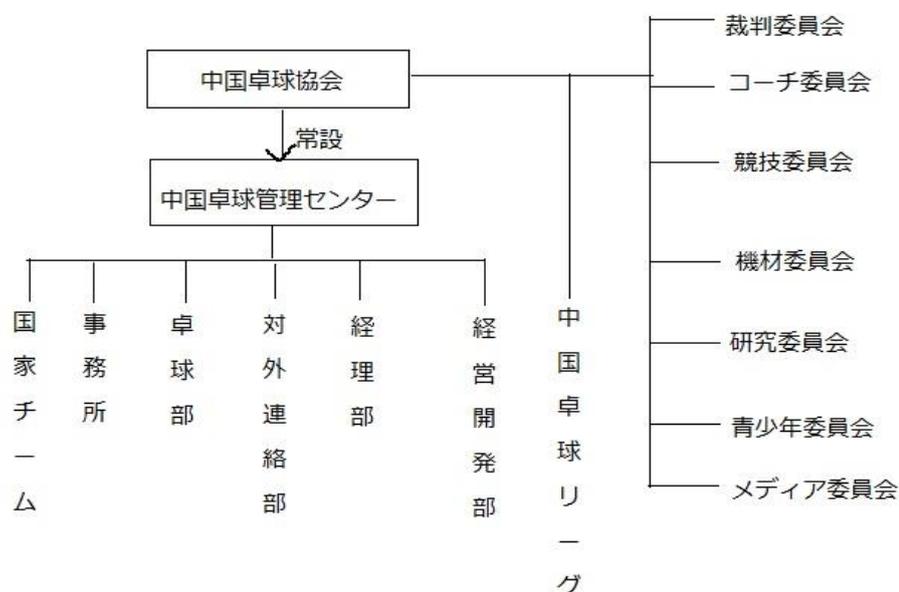


図2 中国卓球協会の組織

中国卓球協会は中国卓球の最高社団であり、中国卓球管理センターは協会の常設機構である(図2)。協会には裁判委員会、コーチ委員会、競技委員会、機材委員会、研究委員会、青少年委員会とメディア委員会など七つの委員会があり、各種の規定を作り、他国と交流し、コーチと選手を管理する。

第3項 中国卓球リーグ

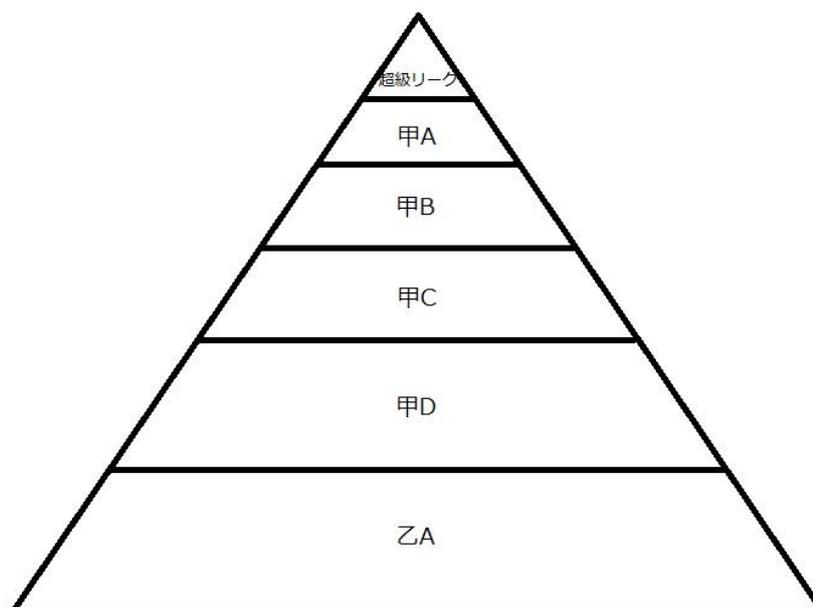


図3 中国卓球リーグ

前述の選手育成システムが存在したことにより、中国では長期にわたりプロリーグができなかった。1994年、当時の管理センター主任であった李富榮は“双軌制”を提出した。つまり、專業選手はプロリーグのクラブ選手として出場できる。ただし、全国選手権や全国運動会の時、自分が所属されている省・市チームに戻る。

中国卓球リーグは1995年発足した。最初、甲乙級しかなかった。2000年から、超級リーグが設立された。これは卓球リーグの頂点であり、男女10チームずつで構成される。超級の下に、甲A、甲B、甲C、甲D、乙Aがある。甲Aは44チーム、甲B、甲C、甲Dがそれぞれ64チーム、乙Aが128チームで構成される。参加チームはピラミッド形になりつつある。チームは、省や市、地域、クラブの名前にスポンサー名がつくのが一般的だ。

「ヨーロッパのクラブ組織に日本の企業スポーツが合体したものである。」²⁾プロリーグが開催されている時、選手はクラブに所属し、それ以外の時は、代表チームに属する。

²⁾「海外でプロ選手を目指す」『卓球王国』2005年06月

また、中国リーグは中国卓球協会が主催し、選手の収入、放映権や広告に及ぶまで、すべて管理している。選手たちが着るウェアや卓球台、ネットに至るまで、全部中国卓球協会の一括契約で決められている。

第4項 海外に行った卓球選手

中国から、直接海外に行く選手には3類型ある。第一類型は他の国の要請により、国家から派遣される選手であり、「公派」という。この類型の選手は公用旅券を持ち、コーチとして働き、給料、交通費など国からもらう。残る2類型は選手として海外のリーグでプレーする。そのうち、公用旅券を持つ選手は「公派自費」選手であり、選手兼任コーチとしてプレーし、プレー先から給料をもらえる。もう一類型は自費選手であり、自分の意志と責任で海外のチームに参加する選手である。韩方廷・谭明义・钟颖慧(2012)は1978年から1995年まで、「公派」選手が約336名であり、1995年長期にわたる海外で定住し、プレーする選手が約220名だったと述べる。

第3節 日本における卓球の概況

第1項 日本卓球選手の育成システム

日本には、基本的に小中高、そして大学へと進む学校単位のクラブ活動から優秀な選手が選抜される「学校スポーツシステム」、そして各地域や全国範囲で選手を集め、独自のシステムで選手を育成する「クラブシステム」が存在する。通常、企業のクラブ、プライベートクラブと学校の代表チームなどから優秀な人材を選抜して、短期的なトレーニングを行い、国際大会に参加する。

2008年4月から、JOCエリートアカデミーを実施している。JOCエリートアカデミーとは将来オリンピックをはじめとする国際競技大会で活躍できる選手を育成するために、味

の素トレーニングセンターを生活拠点として、全国から発掘した優れた素質のあるジュニア選手を近隣の学校に通学させながら、各競技団体の一貫指導システムに基づいた指導を行うプログラムである。そのうち、卓球選手は男女合計 16 名いる。

第 2 項 日本卓球協会

日本卓球協会は 1931 年に発足し、1976 年に財団法人化を果たした。日本の卓球全体を統括している。ITTF プロツアアの荻村杯国際卓球選手権大会やジャパントップ 12 卓球大会、全日本学生卓球選手権大会、全国高等学校卓球選手権大会などの運営を行っている。

第 3 項 日本卓球リーグ

1. 日本卓球リーグの発展

中国とヨーロッパの卓球リーグと違い、日本卓球リーグはプロリーグではない。1977 年に日本リーグを発足させ、実業団の強化が図られ、その後、日本卓球界の技術の中心となってトップクラスの選手のほとんどが日本リーグ加盟チームの選手の時が長く続いた。1995 年、日本リーグは日本卓球リーグ実業団連盟として日本卓球協会から離れ、独立した。主な事業は、前後期のリーグ戦と前後期の総合成績上位 4 チームによるプレーオフ大会「JTTL ファイナル 4」、そしてトップ選手による選抜個人戦のビッグトーナメントである。2008 年、「オープン化」により、大学なども参加できるようになった。2009 年加盟チーム以外の日本代表選手が参加できる「ゴールド制」も採用した。現在、愛知工業大学、朝日大学と JOC エリートアカデミーはリーグに参加している。石川佳純は日立化成のゴールド選手である。

2. 日本卓球リーグにおける中国籍選手

日本卓球リーグにおける中国籍選手には 2 種類ある。

一種類は日本の高校にスポーツ留学し、日本で大学を卒業し、チームに参加しているも

のである。これらの選手はほとんどが、中国にいた時期、省・市チームに入った経験がない。日本の育成システムに従って成長してきた。本文はこれらの選手を中国人選手 (Chinese player) と呼ぶ。2015年リーグに参加した東京アートの張一博、王凱、エクセディの劉莉莎、広島日野自動車の馬文婷は中国人選手である。

もう一種類は中国から来日し、直接に日本リーグでプレーする。つまり、日本の学校に在籍しない。この種類の選手を中国選手 (China player) と呼ぶ。2015年リーグに参加した中国選手は日本生命の文佳、アモスの姚俊羽と十六銀行の楊艷梅など三人だった。

第4節 日本リーグでプレーする中国選手の傾向

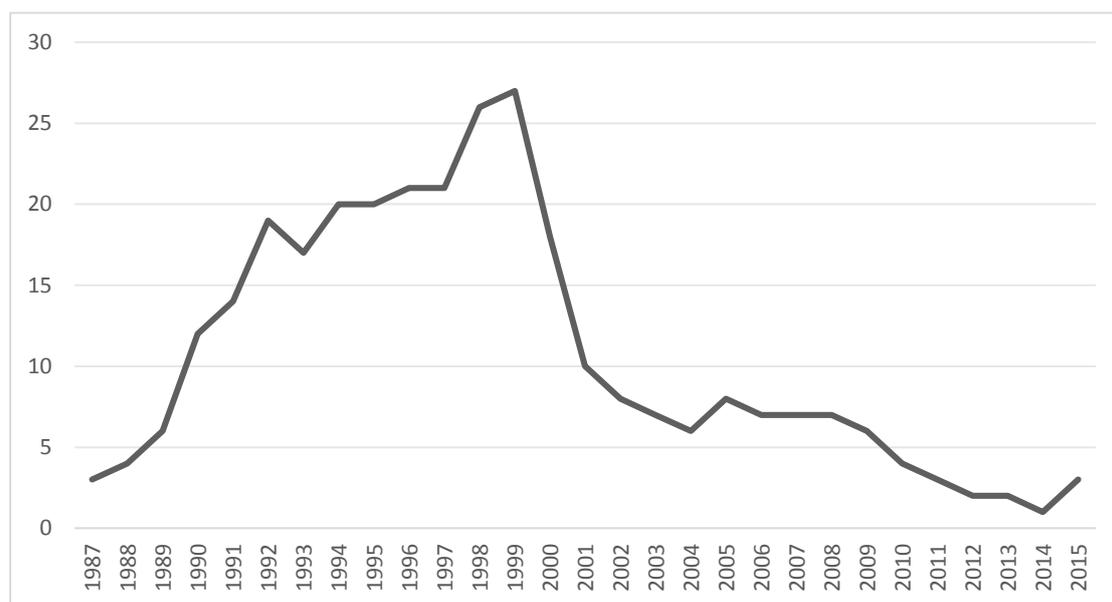


図4 日本リーグでプレーする中国選手の延べ人数の推移

公開されている「日本卓球リーグ個人の部別 ポイント数(20ポイント以上の選手を掲載している)」、2005～2015年リーグ戦記録、そして、選手と関連するウェブサイト、新聞記事、卓球専門誌『卓球王国』などを通じて、日本リーグでプレーする中国選手の情報をもとめた。

1987年高志亮、謝春英、陳莉莉は中国選手として日本リーグで初登場した。これ以降、日本リーグでプレーした中国選手は約60人だった。そのうち、26人が中国国家代表の選手だった。他は各省市代表チームの選手だった。つまり、日本リーグでプレーした中国選手は高レベル選手であることがわかった。しかし、図4に示した通り、90年代に現役や代表チーム引退直後に日本リーグに来た選手の人数と比べ、近年、日本リーグでプレーした中国選手は減少し、また、中国リーグ、日本実業団リーグを掛け持ちでプレーしていた。掛け持ちでプレーする選手は試合がある時日本に来て、なければ、中国に戻るといった形でプレーする。2015年にいた中国選手3人もこうしていた(第1章第3節第3項2を参照)。

第2章 研究の目的と先行研究

そこで、本研究の目的は主に二つある：

- ① 中国選手が海外リーグでプレーするまでのプロセスを分析する。
- ② 近年日本リーグでプレーする中国選手が減少した背景を明らかにする。

Maguire(1999)は、選手が移籍する理由によって、移籍選手を開拓移籍選手、移民移籍選手、金銭移籍選手、流浪の国際移籍選手と帰還移籍選手と五つに分類した。そして、Magee、Sugden(2002)は22名のサッカー移籍選手にインタビューして、Maguireの分類を基に、欲望移籍選手と避難移籍選手を補った。開拓移籍選手(pioneers)は、それぞれのスポーツの美德をほめそやすほとんど伝道師のような熱意を持ち、地元民を彼らの身体習慣とスポーツ文化に転向させる改宗者である(千葉・海老原, 1999)。移民選手(settlers)は、彼らのスポーツをその国にもたらしのみならず、労働する社会に後に移住するスポーツ労働者である(千葉・海老原, 1999)。金銭移籍選手(mercenaries)は、金銭など利益によっ

てより動機付けられる選手である。流浪の国際移籍選手(nomadic cosmopolitans)は、異文化を体験、言語を学ぶためスポーツ経験を使って移籍する選手である。帰還移籍選手(returnees)は、グローバル過程の中で母国に引き付けられる移籍する選手である(千葉・海老原, 1999)。欲望移籍選手(ambitionist)はスポーツキャリアを果たす、レギュラー選手になる或いはより高いレベルリーグに入る欲望を持つ移籍する選手である。避難移籍選手(exile and expelled)は宗教また政治などの原因で、国を離れて他国でスポーツをする移籍選手である。

田(2011)は中国のバスケットボール選手が日本のbjリーグ、JBLに移籍しない原因を6つ挙げた。第1、中国バスケットボール協会・省(市、区)のバスケットボール協会において、選手の移籍を阻害している政策がある。第2、中国プロバスケットリーグとbjリーグ、JBLの交流が少ないので、中国プロバスケットボール選手はbjリーグ、JBLに対して認知度が低い状況である。第3、bjリーグ自体がアメリカの出身の選手に注目し、制限した。第4、JBLでは、日本人選手への出場機会を確保するという目的のため、外国人選手の人数がbjリーグより非常に少ない。第5、言葉、通訳の問題で、中国人プロバスケットボール選手が日本のプロバスケットボールリーグに移籍することが阻害されている。第6、国際的市場で活躍する中国のエージェントの人数が少ない。

松下(2007)は世界のトップ選手と試合をすることは、日本人選手にとってもプラスになる。レベルの高い試合を見せれば、今までよりも観客を増やすことができると述べた。さらに、中国選手が日本リーグで掛け持ちではなく、他の選手と同じ、日本定住でプレーできれば、日本選手と練習や試合を通じて、中国の技術、中国チームの練習の考え方、実際卓球練習のやり方などを教えることは前述の他国の選手をライバルに育て上げるという方針と一致すると考える。

また、従来の移籍に関する研究はサッカー、バスケットボールなど欧米が強く、プロ化程度の高いスポーツを対象としていた。卓球のような種目については研究がなかった。卓球もサッカーやバスケットボールなどと似ている要因に影響されているのか。以下の分析ではこれまでの他種目の研究成果とも比較し、卓球についての移籍研究を試みたい。

第3章 研究方法

本研究では、ウェブサイト、新聞記事、卓球専門誌などを通じて、情報を収集した。

さらに、Y、W、KとX4人を対象にインタビューを行った。Y、Wは中国からの来日選手、Kは日本の大学教授、Xは中国のスポーツジャーナリストである。また、Hチームのスポーツ宣伝担当のOさん、2015年日本リーグにプレーした中国選手のひとりJさんとは直接に会えなかったが、メールを通じて補充情報を得た。

四人へのインタビューは2段階に分けて行った。

まず、9月～10月、Y選手とW選手を対象にそれぞれインタビューを行った。YさんとWさんは元中国国家代表選手であり、世界選手権メダリストだった。90年代、日本リーグに参加し、その後、日本に帰化した。現在、ふたりとも自分の卓球クラブを運営しながら、学校とチームのコーチを担当している。ふたりに「来日したきっかけ」「日本リーグに参加した理由」「現在日本リーグにプレーする中国選手」について質問をした。

インタビューと調査資料を踏まえ、中国選手が海外リーグにおいてプレーするようになるまでのプロセスのパターンをまとめた。そして、これらのパターンについて、K先生とX記者へのインタビューを行った。K先生は大学の教授であり日本卓球協会の理事も務めている。X記者は中国最も権威である卓球雑誌『卓球世界』でジャーナリストとして8年間働いてきた。K先生に「なぜ日本リーグにプレーする中国選手が減少したか」「なぜ90年代日本リーグに参加した選手が多かったか」「日中の卓球交流」について聞いた。X記

者には「中国卓球協会あるいは代表チームには選手が海外でプレーすることについて規定があるか」「中国選手が海外でプレーする現状」「中国国家チーム引退選手の現状」などについて聞いた。X 記者は中国在任のため、WeChat という通話アプリを使い、インタビューを行った。

そして、インタビュー内容と新聞、雑誌、ウェブサイトなどさまざまな情報をとりまとめ、各要素を巡る分析を行った。

第 4 章 結果及び考察

第 1 節 海外リーグプレーするまでのプロセス

新聞、雑誌、及びインタビューに基づき、中国卓球選手が海外リーグプレーするまでのプロセスを図 5 に示す。海外リーグプレープログラムが四つのパターンに分けられている。現役選手の場合はパターン 1 とパターン 2 であり、引退となる場合はパターン 3 とパターン 4 である。

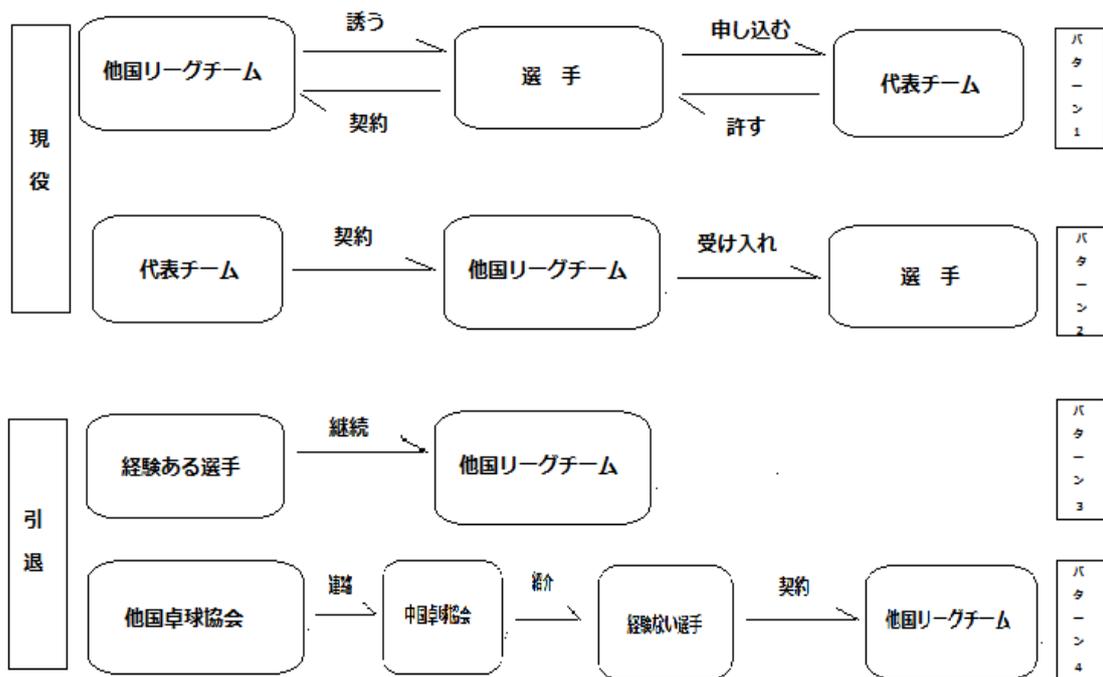


図5 中国卓球選手が海外リーグでプレーするまでのプロセス

パターン1

1992年 R チームが北京で合宿した時に、私は練習試合に出場して、そのあと日本に招待された。(Y 選手)

彼ら(日本のチーム)は私の試合を見た後、私に連絡をくれた。代表チームに申し込んだ後、日本に来た。(J 選手)

21歳の時、日本リーグで売り出し中のチームだった東京アートでプレーをしてみないかと勧誘をうけた。それは先に東京アートでプレーしていた謝超杰からのオファーだった。(「韓陽」『卓球王国』(2013))

他国リーグチームは中国チームでプレーしている中国選手を、観戦、合宿などを通じて、見つけ、誘う。選手が行きたいなら、所属している代表チームに申し込みを出す。代表チ

ームが許せば、選手はその国のチームの選手としてプレーできる。パターン1は自費選手に属する。

パターン2

お互いに、技術を交流するために、代表チームは指定された選手を他国リーグチームに短期的に派遣する。

2006年、現役国家代表の王皓、陳玘と侯英超はヨーロッパのチームに数ヶ月派遣された。パターン2については、中国国家代表チームが他国リーグチームと契約するので、選手たちが他国チームから給料をもらうかどうかに関する具体的な資料を得られなかったため、公派自費選手かどうかを判断できない。

パターン3

現役時、海外でプレーした経験を持つ選手が引退後、以前の情報網を利用し、自ら他国チームと連絡を取り、再びその国のリーグに参加する。パターン2の例として言及した侯英超は例の一つであり、引退した後、ヨーロッパのチームに参入し、現在、オーストリアのニーダーでプレーしている。パターン3は自費選手である。

パターン4

当時、私はもうすでに引退していた。ある日、元国家チームの監督が日本のSチームは中国選手が一人欲しいという話を教えてくれた。Sチームと相談し、契約を結んだ。(W選手)

他国卓球協会は高レベルの選手を自国に導入しようとする時、中国卓球協会と連絡を取り、中国卓球協会は情報を選手に渡し、選手からの同意を得れば、契約を結ぶ。パターン4は公派自費選手といえる。

上記の四つのパターンから、「他国リーグチーム」「選手」「代表チーム」「他国卓球協会」

「中国卓球協会」は中国卓球選手が海外リーグでプレーすることに影響を与えたことが明らかになった。

第2節 減少の背景

インタビューに基づき、新聞報道、規定等資料を再収集し、「他国リーグチーム」「選手」「代表チーム」「他国卓球協会」「中国卓球協会」の角度から、目的②日本リーグでプレーする中国選手の減少の背景を検討する。

第1項 選手

1. 昔、日本リーグでプレーした理由

90年代、日本リーグでプレーした時、選手兼任監督で、とても楽しかった。年間14試合で、一千万円の年収をもらった。一方、当時の中国では、私のような世界チャンピオンレベルの選手でも月給130元だった。(W選手)

90年代、国家代表でも年間二、三の国際試合しか参加できなかった。海外でプレーすれば、世界を見えると思った。もし、日本に来なかったら、ヨーロッパに行ったと思う。

(Y選手)

2. 現在、日本に来ない理由

中国がプロリーグを設立し、そこで、プロとして生活できるという基盤ができた。(G先生)

日本リーグでプレーしている高レベルの中国選手は殆どいない。今、超級リーグでの収入が日本リーグより高い。日本リーグでプレーする必要がない。

現在、中国国内において、スポーツ環境が良く整っている。近年、中国に戻り時、最近の世界チャンピオン選手と会った時、彼らの車が前回見たものと違う。90年代、帰国し

た時は、よく国家代表の後輩たちにごちそうした。現在は私をご馳走になっている。

80、90年代、たくさんの高レベル選手は海外にいった。格差が大きすぎたからだ。(W選手)

現在、国家代表選手は超級リーグでプレーしたら、日本リーグでプレーするより収入が高いと思う。だから、日本に行く必要がない。(X記者)

現在、ITTF ワールドツアーがあるので、毎年いろんな国に行ける。今の選手たちにとって(外国に行くのは)もう飽きたかもしれない。(Y選手)

3. 選手側を巡る考察

選手の日本リーグへの参加は報酬と海外出場のチャンスと関わっている。

① 収入

図6に示されたとおり、選手の収入源は多くなり、高騰した。

90年代、選手の収入は代表チームからの収入と大会賞金しかなかった。当時、世界選手権、オリンピックなど世界大会でメダルを取ったら、約10000～50000元の大会賞金を得られた。ただし、当時、このような大会が少ないから、賞金を得られるチャンスが非常に少なかった。

で換算すると、約 32 万元であった。W選手は日本リーグでプレーする収入はほぼ中国国内収入の 200 倍で、非常に大きな格差だろう。

表 1 中国超級リーグ選手給料標準

単位: 万元

	特級選手 ^{b)}	一級選手 ^{b)}	二級選手 ^{b)}
基本給	50	20	5
成績賞金 ^{a)}	$1y + 3.5x$	$0.4y + 2.5x$	$0.2y + 2.5x$

*a) 成績賞金 = 出場費 (ゲーム数: y) + 勝ゲーム費 (勝ゲーム数: x)

b) 特級、一級、二級選手: 『中国卓球超級リーグ選手等級区分方法』4) の評価標準で選手のレベルを定める。

表 1 は 2012 年中国卓球協会が発表した「超級リーグでプレーする選手の登録と移籍の実施方法」⁵⁾による給料の計算標準である。2015 年の超級リーグもこの標準に従っていた。選手の給料は基本給と成績賞金からなる。選手それぞれについて前年度の、中国リーグと国際大会の成績をポイントに換算し、選手を特級、一級、二級選手に定める。特級、一級、二級選手の基本給はそれぞれ 50 万元、20 万元、5 万元。特級選手は 1 ゲームに出場すれば、1 万元をもらえる。そして、そのゲームを勝つと、さらに 3.5 万元を得られる。

表 2 2015 年中国超級リーグ 特級選手収入 (最高と最低)

単位: 万元

	出場 (ゲーム)	勝ゲーム	基本給	総計
樊振東	1 X 36	3.5 X 35	50	208.5
張繼科	1 X 10	3.5 X 7	50	84.5

*出場数、勝ゲーム数⁶⁾

⁴⁾ 資料より <http://www.jstta.cn/default.php?mod=article&do=detail&tid=175965>

⁵⁾ 資料より <http://cttsl.sports.cn/announcement/2013-05-29/2351710.html>

⁶⁾ 資料より <http://cttsl.sports.cn/grpm/index.html>

現在、W選手は日本リーグにいれば、約 500～2000 万円⁷⁾の年俸を得られる。2015 年の為替レート⁸⁾により、約 30～104 万元である。一方、W選手は超級リーグにいれば、特級選手と認められる。表 2 の通り、今年、特級選手たちの最低と最高収入をみると、84.5 元～208.5 万元のクラブ収入を得られ、さらに、代表チームの月給と広告収入を加えれば、日本リーグより倍以上高い。

又、表 3 に示した、中国国民平均収入に比べると、現在、W選手のようなレベルの卓球選手の収入が非常に高い。J選手は甲 A でプレーしているが、報酬は普通の国民よりも高い。X記者は現在、選手が故郷を離れ、他郷で生計を立てる必要がないと述べた。

表 3 1991 年、2015 年 中国国民収入と選手収入の比較

	中国国民平均年収	W選手年収	J選手収入	Wと国民の比率
1991 年	1570 元 ⁹⁾	1560 元		99.3%
2015 年	53551.93 元 ¹⁰⁾	84.5 万元	14 万元	1577.9%

*W選手と J選手 2015 年の収入はクラブからの収入のみ

現役を引退した元国家チームの選手について、セカンドキャリアは多様である。例えば、王皓は解放軍代表チームの監督になった。王励勤と馬琳は行政官員になり、それぞれ上海と広東省の卓球・バドミントン管理センターの主任になった。企業に就職した選手もいる。

...

コーチの給料だが、はっきりいえない。地域により違う。例えば、北京チームのコーチは毎月約七千～八千元、ボーナスは別である。(X記者)

中国国家统计局のデータ¹¹⁾より、2015 年北京住民の前半年(1 月～6 月)収入は平均

⁷⁾ 「卓球のプロ選手になる」『卓球王国』2005 年 06 月 より

⁸⁾ 中国人民銀行のデータで計算すると、2015 年均日中為替レート 1 万円=519.5 元。

⁹⁾ 『1991 年国民経済と社会発展の統計報告』中国国家统计局 1992 年 2 月 28 日

¹⁰⁾ 中国国民平均収入統計データより <http://data.stats.gov.cn/easyquery.htm?cn=B01&zb=A0501&sj=2015C>

¹¹⁾ 資料より <http://data.stats.gov.cn/easyquery.htm?cn=E0102&zb=A0301®=110000&sj=2015C>

36592.15 元である。つまり、平均月給は 6098.69 元である。引退後、現役時代のような高い収入をもらえないが、普通のサラリーマンよりも高い。しかも、安定的な仕事を一生続けられる。海外でプレーすると、将来に対する不安があり、さまざまな問題が生じるだろう。

「超級リーグでプレーする選手の登録と移籍の実施方法」¹²⁾によれば、超級リーグは選手を獲得するため選手の所属チームに移籍金を払い、特級が4年間400万円、一級200万円、二級100万円である。また、選手が得た広告など商業収入からも一部を所属チームに出す。そこで、コーチの収入が上がった。

90年代、WとYのような世界レベル卓球選手は年収が少なかった。また、緒言に述べた通り、彼らは子供のころからスポーツを中心に生きてきて、知識不足だった。このため引退した後、生活が厳しくなった。選手は生活のために、海外に行った。選手の収入が増えるように、中国卓球協会はヨーロッパと日本を真似し、中国卓球プロリーグを設立した。

また、近年、中国スポーツ事業の繁栄により、より多くの企業がスポーツを用いて自社を宣伝するようになっている。このため、国家チーム、クラブのスポンサーになり、また選手を自社のCMに起用している。このため、選手の収入も豊かになった。

このため、高レベル選手は日本リーグに来るモチベーションがないだろう。

②海外に行くチャンス

80、90年代まで、卓球の国際大会は世界卓球選手権、ワールドカップ（卓球）とオリンピックだけであった。選手たちは海外に行くチャンスが限られていた。

1996年からITTFワールドツアーが世界各地で開催された。最初の10カ所から今年の22カ所まで増えることで、中国選手が海外に行くチャンスをくれた。このため、昔のよ

¹²⁾ 資料より <http://cttssl.sports.cn/announcement/2013-05-29/2351710.html>

うに世界を見るために海外リーグに参加するモチベーションが低くなった。

第2項 日本卓球実業団チーム

1. チームの減少

昔、日本リーグ実業団のチームが多かったのは、やはりどの企業も潤沢な資金があったからで、それで、強い外国選手をひとり、ふたり、そのチームにいれました。(K先生)

①住友生命、住友金属小倉、武田薬品湘南、松下電器、松下電工宏根、日産自動車、健勝苑京都、健勝苑愛媛、健勝苑、和歌山銀行、第一勧業銀行、池田銀行、北陸銀行、百十四銀行、ラララ(寿屋)、びわこ銀行、ソニー一宮、さくら銀行、グランプリ大阪

② 十六銀行、日立化成、日本生命、東京アート、サンリツ、エクセディ、アスモ

①と②¹³⁾は過去、中国選手を採用したチームであった。①の19チームは今もう日本リーグに存在していない。いわゆる、中国選手を採用しようと思うチームの大多数が休部か廃部となり、日本リーグにいる中国選手は少なくなった。

「2月9日、日産自動車は業績悪化に伴う業績改善策として、同社の野球部・卓球部・陸上部の休部を発表した。この発表は電撃的なもので、卓球部関係者にも知らされていなかったことが、一部報道などで明らかになった。

この日、同社は09年3月期の営業損益予想を、1800億円の赤字に下方修正したことを発表すると同時に、企業スポーツの休部を発表した。日本卓球リーグの事務局では、1月末に日産の来期の登録を受け付けたばかりだった。」(「日産自動車卓球部、休部か」卓球王国 Web2009年09月02日)¹⁴⁾

「松下電器産業は24日、Lリーグの女子サッカー部と日本リーグ所属の女子卓球部を

¹³⁾ 筆者は「日本卓球リーグ個人の部別 ポイント数(20ポイント以上の選手を掲載している)」により①と②をまとめた

¹⁴⁾ http://world-tt.com/ps_info/ps_report.php?&pg=HEAD&page=BACK&bn=1&rpcdno=347#347

廃部すると発表した。…

同社は個人消費の低迷などの影響を受け、経営状況が悪化していた。4月ごろからリストラの一環としてスポーツ活動の見直しが行なわれ、歴史が浅く、PR効果も少ないと判断された女子のサッカーと卓球が対象になった形だ。(以下、省略)」(朝日新聞・朝刊 1999/9/25(土))

日本卓球リーグは企業スポーツである。チームの経営費用は企業から出している。Hチーム0さんはチームにはスポンサー、賛助会員、サポーターなど一切いないと述べた。つまり、チームが存在するかどうかのはすべて母体である企業側が判断している。以上の報道のように、経営不振で経費節減のため企業がチームの休部さらに廃部を実施したのである。ちなみに、松下電器は当時、中国選手喬紅を採用していた。中国選手金恩華は2009年日産自動車に所属していた。

2. チームの選手像

試合だけやって、勝てばいいと、それ、二、三年で、帰るっていう人、企業のほうも、あまりこのまなかったんが、つまり、日本で生活をして、チームに馴染んで、ずっと働いていける人を、やはり企業が求めた。(K先生)

「東京アート:韓陽選手のような契約社員と、遊澤選手、大森選手のようなフルタイムで卓球専念できる正社員で、現役を終えたあとは会社に残って仕事に従事できる。

十六銀行:一般行員と同じ採用だが、フルタイムで練習できる環境になっている。

日本生命:正社員(一般職)、もしくは嘱託社員としての採用。嘱託社員はフルタイムでの練習。

サンリツ:すべて契約従業員で1年ごとの契約。フルタイムで卓球練習ができる。」

(「企業スポーツ事情と企業スポーツから飛び出たプロ経験者」『卓球王国』2005年06月)

現在、知る限り、日本卓球リーグ所属チームの中では東京アート、十六銀行、日本生命とサンリツの選手だけはフルタイムで練習できる。この4チームを除いて、選手は一般社員として採用され、一般業務を午後2、3時まで行い、その後練習に参加する。つまり、契約選手を採用したいチームは少数であり、多数のチームは伝統的な社員選手を求める。

「中国選手が入れる枠は非常にすくない」(K先生)。しかも、「選手の人たちには会社の給料を払っているわけです。プロのように、一千万、二千万っていうわけじゃないです。普通の企業のサラリーマンと同じ待遇です。」(K先生)

この条件は中国現役選手にとっては不可能である。引退した後日本に来たW選手は日本に来たばかりの時、会社が私と五年契約したかったが、私は断った。日本で二年プレーして帰国するつもりだと言った。大多数の中国選手はW選手と同じ、日本のチームでプレーし、稼ぎながら日本の生活を体験するつもりで、二、三年後に帰国するという考えでいる。これは日本のチームの考えと一致しない。また、知識不足の中国選手にとって、日本語を勉強しながら、会社の業務を行うのは難しいであろう。そこで、近年、日本のチームは高校から来日し、日本の大学を卒業した中国人選手を採用する例が増えてきた。このような選手達はチームが求める選手像と一致する。

3. 日本代表選手の減少

日本リーグのチームが中国選手を招く主な理由は四つある。

一つ目はチームがリーグの優勝を獲得するため選手を呼ぶ。

二つ目はチームが降格を防ぐため中国選手を採用する。

三つ目はチームの昇格のため。

四つ目は練習の考え方や卓球練習のやり方などを学ぶ。

過去、佐藤利香、梅村礼、小西杏、岩崎清信、松下浩二、渋谷浩など元日本代表達は日

本リーグでプレーする時に、チーム間の競争がはげしく、勝つために同じレベルの中国国
家チームの選手を呼んだこともある。しかしながら、現在世界ランキング 5 位の水谷選手
と 12 位の丹羽選手はヨーロッパのチームでプレーしている。水谷隼選手はロシアの UMMC、
丹羽孝希選手はフランスのエヌヌボンに所属されている。日本リーグ男子 1 部に優勝の
可能性があるチームには各々二三人のナショナルチーム選手がいるので、実力が相当し、わ
ざわざ中国選手を呼ぶ必要がない。

女子の場合、日本生命にナショナルチームの選手は四名いる。世界順位はそれほど高く
ない。石川佳純選手がいる日立化成に勝つため、日本生命は中国国家代表の文佳を呼んだ。

日本のトップ選手が日本リーグでプレーしない理由について、『卓球王国』の編集長で
ある今野は「なぜ 23 人もの日本選手が海外でプレーするのか」¹⁵⁾一文で日本の企業スポ
ーツとしてプレーしても年 2 回の日本リーグ、実業団選手権や社会人選手権、そして全日
本選手権と試合は限られている。仕事をやりながらのアマチュア選手ならばそれでも十分
だろう。しかし、プロ選手としてはあまりに稼ぐ場が少なすぎる。そして自分の腕を磨く
場が少ないために海外に活躍の場を移す選手が増えていくのだと指摘した。

4. 開催時期の重複

2015 年中国超級リーグの開催時期¹⁶⁾

第 1 段階: **5 月 24 日、27 日、31 日**

6 月 3 日、7 日、10 日、14 日

7 月 12 日、19 日、22 日、26 日、29 日

8 月 16 日、19 日、23 日、26 日、30 日

第 2 段階: **9 月 11 日、9 月 13 日**

¹⁵⁾ http://world-tt.com/ps_info/ps_report.php?pg=HEAD&page=BACK&bn=1&rpcdno=1918#1918

¹⁶⁾ 資料より <http://cttsl.sports.cn/announcement/2015-05-12/2351634.html>

2015年日本リーグの開催時期¹⁷⁾

前期: **5月7日、9日**、14日

6月3日、4日、5日、8日、9日、10日、11日、12日、13日、14日

後期: **10月2日、13日、22日、26日、27日、29日、31日**

11月3日、4日、6日、7日

以上は2015年中国超級リーグと日本リーグの開催時期である。2015年文佳選手は北京首鋼(チーム名)と日本生命の選手として、中国超級リーグと日本リーグを掛け持ちプレーしていた。太斜体字日は文佳選手がプレーした日である。文佳選手は代表選手である時期には日本生命の試合に参加できる。中国超級リーグが開催される四ヵ月間、北京首鋼は文佳選手の保有権があるため、彼女は日本リーグ前期の試合に二日しか参加しなかった。このような状況において、お互いに合意できないと、中国選手を呼ぶ計画が白紙になるかもしれない。選手側からみると、掛け持ちプレーすると、疲労しやすい、怪我の発生率が高くなるという懸念があるため、日本チームからの誘いを断る。

5. 循環の消滅

Hチーム0さんは以前、自社卓球部に中国遼寧省、河北省、北京出身の選手がいた関係で、遼寧省チーム、河北省チーム、北京チームへ練習に行ったことを述べた。

また、選手が海外でプレーするパターン1により、チームに所属している中国選手の紹介や合宿を通じて、新しい中国選手を見つけられるとの循環がある。しかし、今、所属の中国選手が帰国した後、新しい中国選手を呼ばないと、選手からのネットワークがなくなり、この循環もなくなる。

¹⁷⁾ <http://www.jttl.gr.jp/taikaiinfo/>

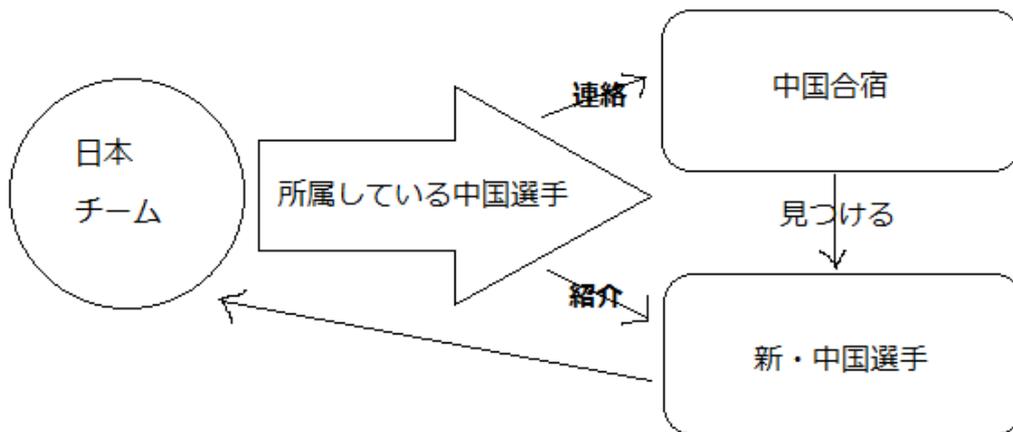


図7 中国選手を見つける循環

6. 日本チームを巡る考察

チーム側から見ると、チームの減少、チームの選手像、ライバルの減少、開催時期の重複と循環の消滅によって、中国選手が減少した。

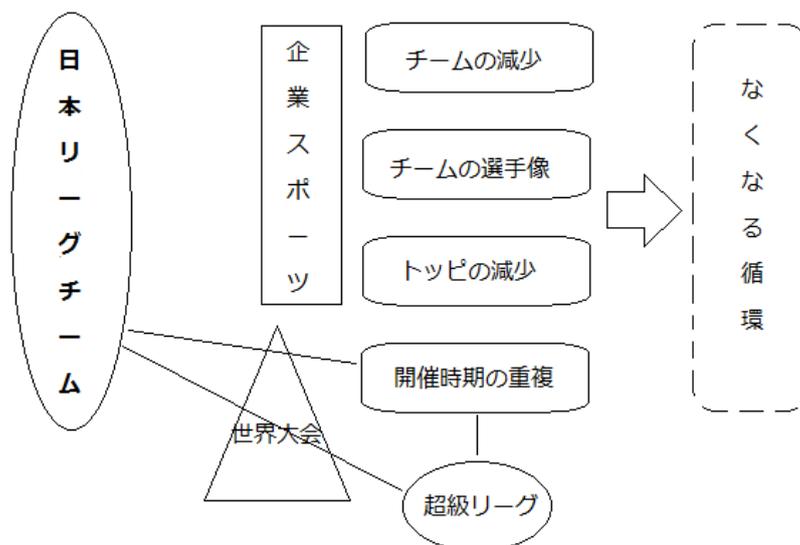


図8 日本チーム側の分析

企業経営状況により休部や廃部が相次ぎ、チーム数が減少した。

中国選手は企業が求める選手像と適わない。

日本トップクラス選手のヨーロッパ移行により、各チームの実力は同じぐらいになった。

日本卓球リーグは企業スポーツである、企業はチームの選手採用、チームの存廃を左右する。そして、日本トップクラス選手が日本リーグに離れる原因を尋ねると、日本リーグは企業スポーツであり、プロリーグではないと今野が指摘した。

中国超級リーグの開催日は国際大会や国内事情で決められる。日本卓球リーグの後期は11月に置かれたのが、前期が超級リーグとほぼ同じ時期であるのは、国際大会を配慮していると推測する。

第3項 中国卓球協会及び代表チーム

第1章第2節第2項で書いた通り、中国卓球協会、及び協会の常設機構である中国卓球管理センターは中国卓球の最高管理部門である。国家チームを含む、すべての省市チームは中国卓球協会の規定に従わなければならない。そこで、中国卓球協会と代表チームを分析する。

80年代から、中国の卓球選手は海外でプレーすることが流行していた。人材の過度の流出を食い止めるため、1989年05月31日に国家体育委員会(現国家体育総局)は『選手が海外でプレーする若干の暫定規定』を発表した。よって、現役引退問わず、選手が海外でプレーできる年齢、競技レベル、移籍金などが具体的に定められた。①選手がプレーする時に、年齢が男性28歳、女性は26歳以上である。②オリンピック、世界選手権、ワールドカップ上位六名及びアジア大会、全国、アジア選手権の上位三名の選手は所属する種

目の全国協会の同意をもらい、国家体育委員会に申告し、同意すれば、ビザの申請ができる。③選手の移籍金と給料について、採用する外国チームと選手が所属している協会は相談し、定める。

ただし、この規定は1999年までで中止した。現在、代表チームが同意すれば、年齢を問わず、移籍金もなく海外にプレーに行ける。中国卓球リーグのほうも、掛け持ちプレーすることを許す。Jさんは所属している代表チームの許可をもらった後、日本リーグでプレーした。しかも、日本チームからもらった収入はすべて自分の所得になり、代表チームに納付する必要がない。現在、中国卓球協会は選手が海外でプレーすることを支持することが分かった。しかし、選手が海外でプレーすることについての奨励政策はない。その一方、海外の選手とクラブを中国卓球リーグに参入させる制度を作って、2010年からは甲A、甲Bに各チームが外国選手を採用した。外国のクラブはまるごとリーグに参入することができる。2015年度、日本女子1部の中国電力も甲Aに参加した。このようにして、中国リーグに参加すれば、中国選手と試合も練習もできる、中国の練習方法などを学べる。そこで、中国選手を日本に呼んでくる必要がなくなったのだろう。

第4項 日本卓球協会

表4 2012年まで日本に派遣された卓球選手

氏名	種目	国家	出発年
謝春英	卓球	日本	1985
陳莉莉	卓球	日本	1985
劉洪如	卓球	日本	1987
謝春英	卓球	日本	1988
石岩	卓球	日本	1988
陳丽丽	卓球	日本	1988
乔晓卫	卓球	日本	1989
姚佳音	卓球	日本	1990
李惠芬	卓球	日本	1990
关华	卓球	日本	1990
邹国齐	卓球	日本	1991
韦晴光	卓球	日本	1991
黄彪	卓球	日本	1991
謝春英	卓球	日本	1992
关华安	卓球	日本	1992
高丽娟	卓球	日本	1992
杨玉梅	卓球	日本	1993
陈怡玲	卓球	日本	1993
童小武	卓球	日本	1994
黄智敏	卓球	日本	1994
于沈潼	卓球	日本	1994
周兴江	卓球	日本	1994
李雁	卓球	日本	1994
应荣辉	卓球	日本	1994
王永刚	卓球	日本	1994
綦戈	卓球	日本	1994

中国体育総局人材資源開発センターデータ より

上表に載せている選手は国によって派遣される、公派コーチや公派自費選手である。卓球で一番年次が早い謝春英と陳莉莉は日本リーグに初登場の中国人だった。つまり、中国卓球選手が最初日本リーグに参入するパターンは初期にはパターン4の公派自費選手だった。バスケットボールやサッカーなどプロ化が進んだ種目と違い、エージェントという仲介者がいない。両国の卓球の組織が最初つながりを作って、そして、それを基に、コーチと選手、選手と選手、コーチとコーチ等各種の繋がりをつくって、ネットワークになる。

第1章に述べたとおり、他国からの依頼に基づいて中国が選手を派遣する。他国が依頼しないと、派遣が発生しない。1995年日本卓球リーグ実業団連盟は日本卓球リーグ委員

会から昇格し、独立した。同年中国からの公派選手がいなくなった。つまり、選手が日本リーグに来るパターンの一つがなくなった。しかしながら、日本卓球リーグ実業団連盟の昇格独立と公派選手の停止の関係の有無については得た資料のみでは判断できない。

第5章 結論

第1節 まとめ

本研究ではウェブサイト、新聞記事、雑誌報道、インタビューなど資料を踏まえ、中国選手が海外リーグでプレーするまでのプロセスと近年日本リーグでプレーする中国選手が減少した背景を明らかにした。

中国選手が海外リーグでプレーするまでのプロセスは4つのパターンがある(図5を参照)。

そして、4つのパターンから「他国リーグチーム」「選手」「代表チーム」「他国卓球協会」「中国卓球協会」の視点から日本リーグにおける中国選手の減少の背景を検討した。

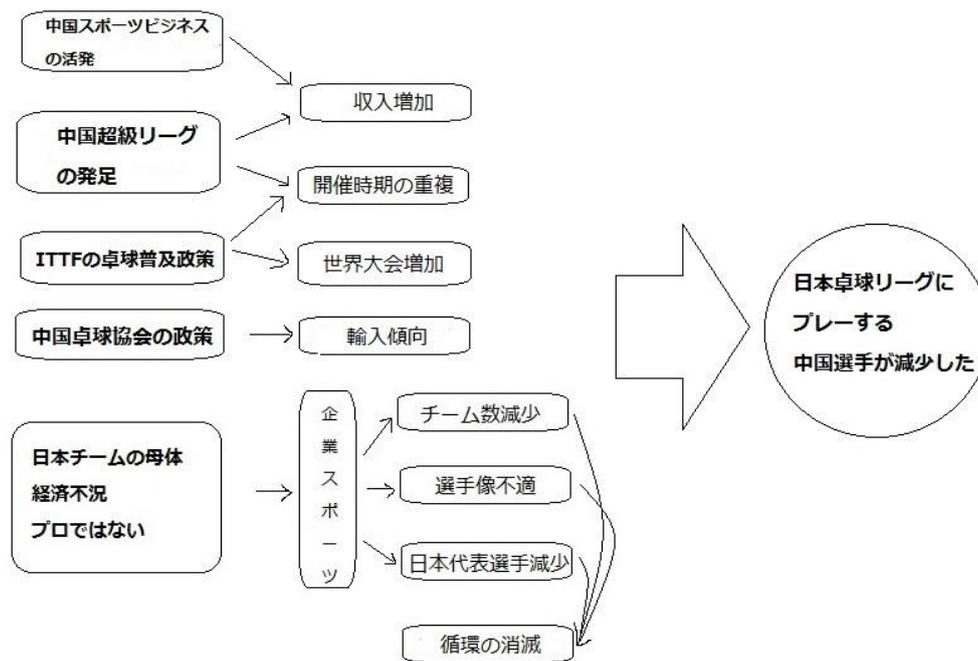


図9 日本リーグでプレーする中国選手が減少した背景

図9に示したように、近年、日本卓球リーグでプレーする中国選手が減少した主な理由としては、下記の5項である。

①2000年中国卓球超級リーグの発足: 超級リーグができたことにより、選手は現役のときの収入が増えただけでなく、引退した後コーチとしても収入が大幅に増えた。報酬の面からいうと、選手たちにとって日本リーグの魅力がなくなった。また、超級リーグと日本リーグの開催時期が一部重なっているため、選手も自己判断して、中国超級リーグに参加し、日本リーグの出場をやめる可能性がある。

②中国スポーツ業界・経済の繁栄: 中国卓球協会は選手の商業価値を開発し続けている。これにより、選手の収入が増え、所属チームにも巨大な利益をもたらした。選

手は中国リーグにおいても活躍でき、将来の見通しがよい。わざわざ日本リーグに参加する必要がない。

③ITTFによる卓球普及政策:ITTFは卓球の普及に向けて、より多くの国家の卓球協会がITTFの試合に参加できるようにITTFワールドツアーを主催した。これは中国選手の海外活躍に多くのチャンスを提供した。また、中国超級リーグの開催時間、国際大会、チームのスケジュールなどが定められていることから、日本リーグの開催時間と重なり、日本リーグに参加する可能性が低くなった。

④中国卓球協会の対外政策の変化:2009年から中国卓球協会は「養狼計画」を実施し、中国コーチを各国に派遣し、海外のチームに作戦・選手の指導方法などを移転しようと、いわゆる「コーチ輸出」という方法を打ち出した。それに対し、現在は海外選手、海外のクラブを中国卓球リーグに召集し、中国の環境に馴染ませ、育成しようとしている。中国選手がわざわざ日本リーグに参加する必要がない。

⑤経済不況で、チームの母体である企業は余計な経費を使わなくなった。休部、廃部により、チーム数が減少し、中国選手も減少した。また、企業はプレーと一般業務を両立できる選手のほうを好む。社員選手はプロより安いし、社務もできるからだ。しかし、現在日本のトップ選手の大多数はプロになりたい。そこで、ヨーロッパに移籍するトップ選手が増えている。日本リーグ各チームの実力は均衡しており、順位を上げるために中国選手を招く必要がない。また、本来、中国選手がいるチームは定期的、あるいは継続的に新しい中国選手を呼ばないと、選手を招く循環がなくなる。以上により、中国選手が減少した。

第2節 先行研究との比較

①中国卓球協会にはバスケットボール協会のような移籍の阻害政策がない。しかし、選手の二重身分は選手が海外でプレーすることに影響を与える。

②仲介が少ない。バスケットボールはプロ化が進んでいて、エージェントのような正式な仲介者がいる。一方、卓球では、社交的なネットワークが仲介の役割を果たしている。

第3節 日本卓球プロリーグ、卓球アジアリーグへの期待

現在、日本選手 23 人はヨーロッパのクラブに登録されている。日本男子選手ランキング(実力上位 8 名)において、東京アートの村松選手、リーグ出場していない松平選手を除き、6 人がヨーロッパのクラブに所属している。日本にはプロリーグがないからである。90 年代以降、プロリーグを作って欲しいという声が広がっているが、今までも、実現されていなかった。そこで、プロ選手を目指す選手はなかなかリーグに参加できず、海外リーグに出場せざるをえない。昔、日本リーグとドイツリーグは完備した制度と良い報酬があり、中国選手が最も期待しているリーグであった。現在の日本リーグは、「ドイツ等と比べるとレベルの低いローカルなリーグになっている」(松下, 2007)。そして、日本のトップ選手と同じように、「中国選手のヨーロッパリーグへの参加意欲が強まっている。ヨーロッパリーグの報酬が高いし、競技レベルも高いです。」(X 記者)。現在、日本卓球リーグ実業団連盟もプロリーグ設立検討・対応委員会を設立しているが、いつまで検討が続くのか、誰も知らない。

しかし、中国リーグとヨーロッパリーグがあるから、日本リーグが優れた海外選手を導入することは難しいと思う。また、日本には、Jリーグ、野球リーグなどプロリーグがある。卓球プロリーグには、市場があるだろうか?

日本卓球プロリーグより、むしろ、日本、中国、韓国、シンガポール、香港、台湾などアジア各国、地域と連携し、卓球アジアリーグを作ったほうが良いと思われる。競争より、共存のほうが良いだろう。トップ選手を大勢集められ、開催時期も統一できる。中国のライバルを育て上げる計画も実施できると思う。さらに、企業がスポンサーとなる場合、宣伝効果は今よりよいと思う。卓球アジアリーグを設立できれば、選手にも卓球の普及にも役立つと考えられる。

引用・参考文献

- ・魚住廣信, 鄭宏偉(1999)「中国におけるスポーツ選手育成システムの分析」研究所報 4, 48-71, 09-30 兵庫大学
- ・千葉直樹, & 海老原修. (1999). トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ. スポーツ社会学研究, 7, 44-54.
- ・松下浩二. (2007). ブンデスリーガ・中国超級リーグとの比較を踏まえた日本卓球リーグに関する研究. 早稲田大学
- ・田珊. (2011). 外国人選手の移籍に関する研究―日、中プロバスケットボールに着目して―. 早稲田大学
- ・武浩文. (2011). 1960年代以降の中国における競技スポーツ優先政策の確立過程
- ・韩方廷, 譚明义, & 钟颖慧. (2012). 乒乓球海外兵团的发展历程与策略. 体育文化导刊, (11), 38-41.
- ・Magee, J., & Sugden, J. (2002). “The World at their Feet” Professional Football and International Labor Migration. *Journal of sport & social issues*, 26(4), 421-437.
- ・Maguire, J., & Maguire, J. A. (1999). *Global sport: Identities, societies, civilizations*. Polity.
- ・李荣芝. (2012). 乒乓球运动的历史演进及跨文化传播研究(The Table Tennis-Historical Evolution and Communication Between-cultures) [D] (Doctoral dissertation, 上海体育学院).
- ・黄晓龙, 肖哲. (2015). 浅析乒乓球超级联赛双轨制的改革趋势(Study on the Reform Trend of Table Tennis Double-Track System) 湖北体育科技, 34, 3, 244-247

• 高松龄, 翁飏, 诸斌. (2004). 我国运动员, 教练员缴纳个人所得税情况分析 (Analysis on Individual Income Tax Levied of Chinese Athletes and Coaches). 天津体育学院学报, 19(3), 22-25.

• 王婷, 王洋. (2013). 《乒乓世界》关于“海外兵团”的报道分析. 运动, (10).

• 日本卓球協会公式ホームページ <http://www.jtta.or.jp>

• 日本卓球リーグ実業団連盟公式ホームページ <http://www.jttl.gr.jp>

• 卓球王国 WEB <http://world-tt.com>

• 中国国家統計局 www.stats.gov.cn

• 中国卓球協会公式ホームページ <http://www.ctta.cn>

• 中国卓球超級リーグ公式ホームページ <http://cttssl.sports.cn>

• 国際卓球連盟公式ホームページ www.ittf.com